



学校だより

7月号

令和2年7月1日

まちのみんなひとつになあれ

当たり前を見つめ直し、よりよく考える思考を

副校長 恒吉 信一

梅雨の晴れ間、青空のまぶしい季節になりました。長期にわたる臨時休業を終え、まるで長いトンネルを抜け明るい日が差すが如く子どもたちの笑顔と笑い声が学校に戻り1ヶ月が経ちました。授業中、友達と向き合って話し合いをすることはできなかったのですが、教室では、子ども達が前を向いて自分の考えを伝えたり、休み時間にはソーシャルディスタンスを意識しながら楽しそうに友達との関わりをもったりする姿が見られました。

改めて私たちが子ども達から元気ももらいながら過ごしてきた日常に感謝せずにはられません。保護者の皆様や地域の方々も不安は拭えないでしょうが、少しほっとしていることと思います。

振り返りますと、緊急事態宣言が出てから、目に見えないコロナウイルスによって生活が変化しました。大人が不安を感じるぐらいですから、様々なことを敏感に感じる力をもっている子ども達はなおさらでしょう。

ようやく学校が再開され、今まで当たり前と感じていた「友達と会話すること」や「勉強をすること」、「運動すること」など、何気なく過ごしていた日常が実はどんなに尊いことだったか、こういう状況だからこそ、改めて一度考えてみることもよいことだと思います。さらに、世の中の人々がコロナ禍を乗り越え日常を取り戻すために、前向きに様々な知恵を振り絞り、どんな工夫をしているかを思い返すことで、これを自分たちの「生き方」に置き換えてみる必要があるかもしれません。

それは、決して難しいことではなく、まずは子ども達が生活の中で困難や問題に直面したときに、例えば「前向きに考えるとどう?」、「～のときにはどんな工夫をするとよい?」、何か失敗した後でしたら「どんなふうになればよかった?」などと聞いてみるとよいと思います。どんな小さなことでも構いません。いつか子どもが自分自身に問いかけ、「よりよく考える」という思考を身につけて問題を解決できた体験をしたならば、それが次への原動力となり、知恵を振り絞りコロナ禍を乗り越えようとする人々のような「生きる力」に繋がると思います。

世界を見ると感染が広がりつつある国がありますが、知恵を振り絞り工夫しながら感染が収束するよう世界全体が動いています。尊い当たり前の日常を取り戻すために、大人も子どもも含め私たちにできることは何かを考え生活していくことが求められています。

7月からは給食、午後の授業が始まりますが、教育委員会からのガイドラインをもとに、注意を払いながら生活できるように子ども達に問いかけ伝えていきたいと考えています。